

18th

SHACHIHATA

New Product Design Competition

シャチハタ・ニュープロダクト・デザイン・コンペティション

受賞作品集

ごあいさつ
Greeting

今年で18回目を迎えるシヤチハタ・ニュープロダクト・デザイン・コンペティション（SNDC）には、過去最多となる1,681件の提案が寄せられました。

今回のテーマは「つながるしるし」です。つながりが溢れる現代において、あらためて「つながり」とは何かを考え抜いた多様な提案が集まり、審査も盛り上がるものとなりました。毎回新しい形のしるしが登場するSNDCですが、今回も「しるし」の概念を押し広げるような力のこもったアイデアに数多く出会うことができました。さらにここ数年、一次審査通過後に提出いただくモックアップの表現力が増し、今回の審査でも身体的な心地よさや驚きをともなう、リアリティのある作品に注目が集まりました。

伸びやかな視点でテーマを見つめ、誰も想像しなかった新しいしるしの形をご提案くださった方々に、こころよりお礼申し上げます。

コンペ概要

応募受付期間

2025年4月1日|火|——5月30日|金|12:00

テーマ

『つながるしるし』

「しるし」が持つ可能性を広げるプロダクト
もしくは、仕組みをご提案ください。

賞

- グランプリ 1作品（賞金300万円）
- 準グランプリ 2作品（賞金50万円）
- 審査員賞 5作品（賞金20万円）
- 特別審査員賞 1作品（賞金20万円）

審査員

中村勇吾、原 研哉、深澤直人、三澤 遥

ゲスト審査員

大西麻貴

特別審査員

舟橋正剛（一般社団法人未来ものづくり振興会 代表理事、シヤチハタ株式会社 代表取締役社長）

審査員



中村勇吾 Yugo Nakamura
インターフェースデザイナー
tha ltd. 代表

今回特に感じたのは、モックアップのレベルがどんどん上がってきているということです。ハンコなら押せるし、アプリケーションならある程度動くといったふうに、しっかり使えるモックアップで力の入ったアピールをする人が増えたように感じます。一次審査でふわっと通った作品が実物

を触ってみるとすごく魅力的に感じられたり、逆に面白いと思っていた作品の印象が落ちたりということもありました。でも全部にきらりと光るアイデアがあり、これは候補から外したくないと感じる作品の多い、レベルの高い年だったと思います。



原 研哉 Kenya Hara
グラフィックデザイナー
日本デザインセンター 代表

難しいテーマだったと思いますが、最後に残った10作品くらいに関しては今年もレベルが高かったのではないかと思います。グランプリを決める時、製品として高い完成度でできた作品と、「つながる」や「しるす」ということを哲学的に考えアートのような水準でまとめた作品の二

つが残ったのですが、その競い合いが面白かったです。最終的にテーマを棒一本で表現した、非常にシンボリックな作品が選ばれたのですが、シヤチハタの「しるしを押す」という行為を象徴するような、歴代の賞の中でも強い求心力を持つ作品だったのではないかと思います。

深澤直人 Naoto Fukasawa
プロダクトデザイナー
NAOTO FUKASAWA DESIGN 代表

テーマへの意識よりも自分がやりたいことを高い精度で表現することに注力している人が多い印象がありました。特に受賞作品には作者自身の「これだ」という確信のようなものを感じました。また表現が的確で、アイデアと完成形の間に迷いが点も印象的でした。その

分、本コンペが今までに比べて、単なる思いつきではなく深い考えから出た良いアイデアがないと登って来られない場所になってきているとも感じています。毎年良いものが出て来るSNDCですが、今回も難しいテーマのもと、ハイレベルな作品が集まったと思います。



三澤 遥 Haruka Misawa
デザイナー
日本デザインセンター 三澤デザイン研究室

今回選ばれたのは、朱肉やゴム印など従来のハンコと同じ要素を用いながらも、これまでとは異なる機能や性質、体験を提案した作品たちでした。グランプリの「ライン印」は、一度ではなく、複数回押すことで成立する性質に惹かれました。一本のラインが広げる創造性に魅力

を感じます。一次審査には素晴らしい提案がたくさんあったのですが、モックアップの完成度で大きく差がついてしまっている印象がありました。最終審査で一次と違う作品に投票することも多く、最後はモノの力がすごく大事になると改めて実感した審査でもありました。

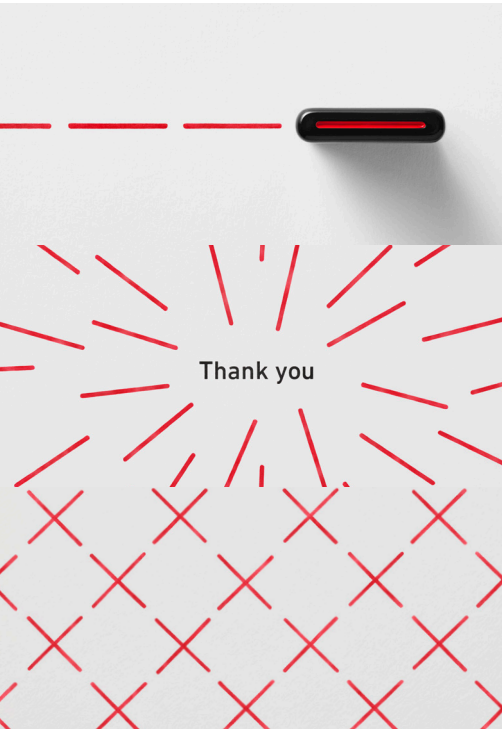
大西麻貴 Maki Onishi
建築家
大西麻貴+百田有希 /o+h 共同主宰

初めて審査に参加したのですが、使い手の身体的、行動を促すような直感的な面白さと、物そのものの美しさ、意味を読みこんだ時にはっとさせられる驚きという三つが重なって提案の魅力が決まっていくのを感じられてとても面白かったです。シートで見た時と実物に触れた時と

で印象が変わるものもあれば、こういう意味があったんだと気づかされるものもあり、しるしというシンプルなプロダクトの中に実現される、つながりの多様さに驚きました。グランプリに選ばれた作品も、つい色んな形で押してみたくなるような人を動かす力を感じる作品でした。



グランプリ



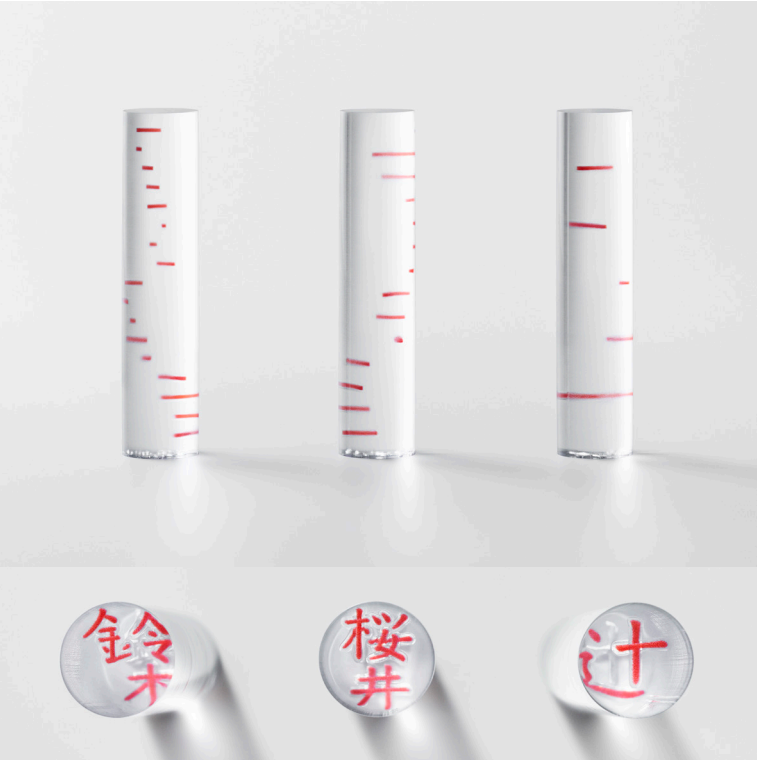
ライン印

品田 聡
Satoshi Shinata

シンプルな一本の短い線が押せるハンコです。線同士をつなげたり、模様のように組み合わせたり、手書きの文字や印刷物に線を添えたりできます。使い方次第でさまざまな表現ができるので、どんどん押して、どんどんつなげたくなる「しるし」の提案です。

「普通はストロークで描く線を、ハンコとして『押す』というのはありそうでなかった体験です。みんなが見落としていた面白さを最小限の手さばきですくい上げているところにエレガントな良さを感じました」(中村)「一本の線を押すという行為のシンプルさに名前や印鑑から離れたしるしの象徴性を感じました。黒く平たいプロポーシオンも綺麗です」(原)「作者は線が多様な意味を持っていることに気づいている。例えば名前だったらそれ自体に意味があるけれど、線は押し方ひとつで対象をクロスアウトすることもハイライトすることもできる。そういう最小の表現で最大の意味の可能性を示しているところがすごいと思いました」(深澤)「線をつなぐというのはテーマに対する一番ミニマムな回答で、見えにくいすぐ足元にあるものを拾われた感覚がありました」(三澤)「実際に押してみたのですが色んな形で押してみたくなるような行動を促すデザインになっていて、今回の賞にふさわしいと思いました」(大西)

準グランプリ



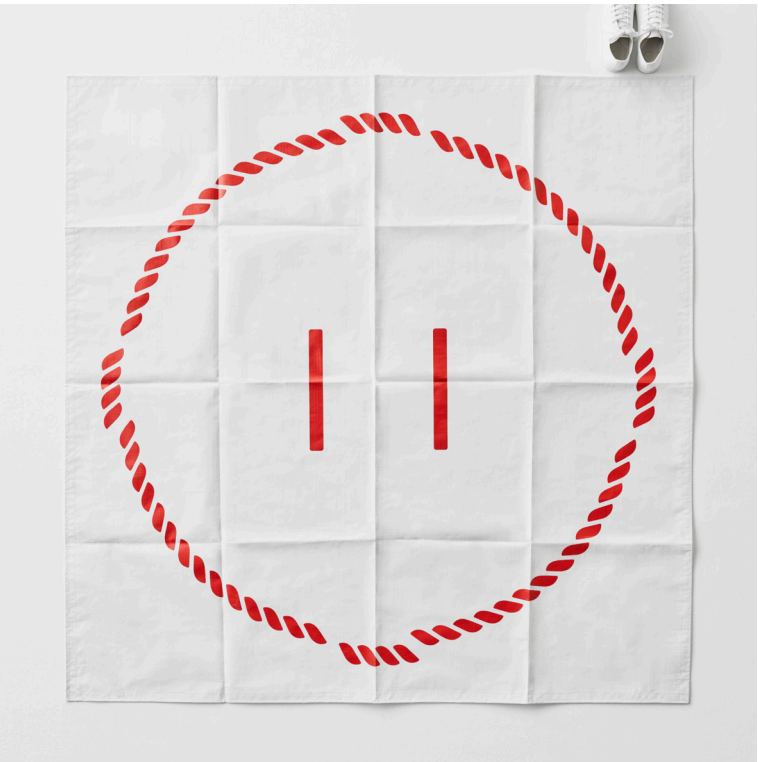
hitohira

畠中正太郎
Shotaro Hatakenaka

直線と曲線がつながり、連なり、文字は意味を宿す。ゆらゆらと舞う木の葉のように、アクリルの中に浮かぶ無数の線。散らばって見えるその断片も、上から覗けばひとつの名前を描き出します。線をつなぎ、言の葉を紡ぐ。そんな文字の美しさを再認識できるしるしです。

「印鑑の黒い円柱のイメージを払拭すると同時に、真上から見ようとすることで名前の向きを間違えることなく押することができるという機能も持たせた、素晴らしいデザインだと思います」(原)「画数の多い名前と少ない名前では横から見た時の印象が変わるので、押す時はもちろん、物としての佇まいからも名前の量感のようなものが伝わってくる面白い作品だと思います」(大西)

準グランプリ



どすこい!シート

千勝美南
Minami Chikatsu

中嶋琴子
Kotoko Nakajima

チーム名: KO-MI

レジャーシートを広げれば、そこは土俵に!友だちと、家族と、たまたま公園にいた誰かと―「はっけよい、のこった!」のかけ声で、思いがけないPLAYが始まるかもしれません。ただの地面がしるしひとつで「人と人が身体を交わしてつながるステージ」になるのです。

「人に行動を促すためのデザインを、サインデザインのようにパーマメントに刻むものではなく、持ち運べるメディアにしてどこにでも展開できるようにしたところにアイデアとしての可能性があると思います」(中村)「遊びという要素に目が行ってしまいがちですが、本当にすごいのはしるしを『地面に押した』こと。シヤチハタのコンペとして、その発見に意味を感じました」(深澤)

審査員賞

中村賞

気配灯

北島 鮎
Ayu Kitajima
チーム名・鮎鹿

鹿島理佳子
Rikako Kashima

元気で暮らしているか気になるけれど、毎日連絡を取り合うのはなんだかちがう。そんな人と、うっすらとした気配でつながり合う壁掛けの明かりです。明かりは対になっていて、一方の近くを通ると、もう一方がゆらめきます。離れて暮らす大切な人と、絶妙な距離感でつながるしるしの提案です。

「絶妙な距離感のあるつながりを、ぼんやりしたイメージだけで表現する手つきが理に合っていると感じました。インテリアとしてもちょうどいい存在感の出し方だと思います。あとモックアップが力作で、ちゃんと動くものを作り込んでいるところに気合を感じました」(中村)



原賞

苗字カルタ

全国にはユニークで興味深い苗字がたくさん！そんな日本の苗字を楽しく学べるカルタです。苗字を知ることは、自分のルーツをたどり、誰かとつながること。背景にある歴史や地名を知るなど、カルタを通して未知の苗字に触れれば、ふだん気に留めない「名前」が少し特別に見えてくるはず。

マシモモモコ
Mashimomomoko

「裏面のつやつやした黒色や、白と赤のコントラスト、縁にくっついた文字の感じなど、まさにハンコと言いたくなるようなリアリティを上手くグラフィックに持ち込んでいます。しるしをしるしとして機能させるのではなく、ゲーム的なつながりにデザインしているところに着想のよさを感じます」(原)



深澤賞

Pum!

赤ちゃんのはっぺたのように柔らかいしるしです。肌に触れるようにやさしく押すと、手のひらのぬくもりで想いがじんわりと滲みます。送る人への「ありがとう」や「おめでとう」の気持ちを手のひらに込めて伝えることができる、柔らかなふれあいを介したしるしの提案です。

濱口真里
Mari Hamaguchi

「赤ちゃんの、肌に触れることでつながり合える。手をにぎる、はっぺに指で触れるといった、身体をつながりは実はすごく濃いもので、そういう直接的な接触につながりを見出してデザインしているところがすごいと思いました。ぺたっとした見た目にも、食べちゃいたいような魅力があります」(深澤)



三澤賞

ハンコドリ

徳山 洋
Hiroshi Tokuyama

人を表す「顔」のような存在である名前と、古くからヒトの生活のそばにいるトリの愛嬌のある姿を組み合わせることで、ハンコという道具がそばに置いておきたくなる愛玩物や民芸品のような存在に。トリをイメージしたポリウムのあるボディは、押印の際はグリップとしても機能します。

「定位置に収納されているイメージがあるハンコですが、室内を自由に行き来する有様も素敵かもしれないと思いました。土台に傾いたハンコを貫通させて鳥を表現している点や印面が顔になっている点がユニークです。使うほど愛着が湧いていきそうな独特な存在感が忘れられません」(三澤)



大西賞

笛印鑑

印鑑と防災用のホイッスルを組み合わせたしるしです。普段はあなたを証明する印鑑として、いざという時は周囲にあなたの存在を知らせ、助けを呼ぶホイッスルとして機能します。目に見えるところに置いたり、持ち歩いたりすることで日常と安心をつなぎ、時には命もつなぐ「しるし」の提案です。

松村佳宙
Yoshihiro Matsumura

「防災にまつわる仕事に関わることが多いのですが、災害で家が壊れてしまった後、何とか取り出したいものとして実印を挙げる方が多いんです。そんな大切な存在である印鑑に、災害時に自分の居場所を知らせるのに必要なホイッスルを組み合わせているところに強い意味があると感じました」(大西)



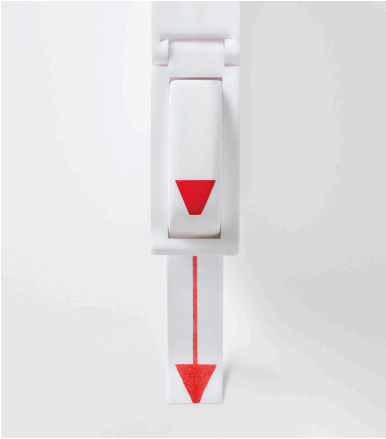
特別審査員賞

YA.JIRUSHI →

重要なことを伝える時、矢印を使った経験は誰にでもあるはず。それはミスを防いだり、強調したり、認識を合わせたりと、誰かへわかりやすく想いを伝えるためです。YA.JIRUSHI→は、そんな矢印の先端をマスキングテープの端に印字することで、人から人へ思いをつなぐためのしるしです。

松尾清晴
Kiyoharu Matsuo

「矢印を使ったマーキングが必要な機会はたくさんあります。マスキングテープに自由に矢印を印字できるアイデアは世の中の需要にフィットしますし、我々が持っている技術の応用で作れるものでもあるので、商品としてとても可能性があると思いました」(舟橋)



デザイン・編集	株式会社 日本デザインセンター
撮影	志村賢一（「気配灯」は除く）
画像補正	市川朋宏
制作	株式会社 JDN
印刷・製本	シナノ印刷株式会社
発行	一般社団法人未来ものづくり振興会
発行日	2025年10月10日